母親と父親のかかわりの特徴と幼児の社会性発達との相互連関

森　下　正　康　　阿　部　恭　子
（本学発達教育学研究科教授）　（発達教育学研究科児童学専攻10期生）

本研究の目的は，父親と母親のかかわりの特徴が子どもの社会性の発達にどのような影響を与えるか，また子どもの社会性の特徴は父親と母親のかかわり方にどのような影響を与えるかを明らかにすることであった。幼稚園の３―５歳児の母親と父親および担任の先生に対して質問紙調査を実施した。母親と父親には親子のかかわりに関する評定を，担任には子どもの社会性に関する評定を求めた。すべてのデータがそろったのは170組であった。各評定について，それぞれ因子分析により尺度を作成し信頼性を確認した後，パス解析を行った。主要な結果は次の通りであった。男児に関しては適合性の高いパスモデルが得られなかった。女児に関しては，比較的適合性の高いパスモデルが得られた。① 母親の「相互作用」と父親の「遊びを通してのかかわり」が多いほど，女児の「協調性」が高かった。② 父親からの「日常的かかわり」が多いほど，かつ母親との「相互作用」が少ないほど，女児の「引っ込み思案」が強かった。次に，子どもの社会性の特徴を説明変数とし，両親のかかわりの特徴を目的変数としてパス解析を行った。男児に関しては有意なパスモデルは得られなかったが，女児に関しては，適合性の高いパスモデルが得られた。③ 女児の「協調性」が高いほど，父親のすべてのかかりが多かった。したがって，主として母親の「相互作用」の多さが女児の「協調性」を高め，その「協調性」が父親のかかわりを増加させると考えられる。④ 女児の「引っ込み思案」は母親の「相互作用」を減少させ，その母親の「相互作用」の少なさが子どもの「引っ込み思案」を強めていた。他方，女児の「引っ込み思案」は父親の全般的なかかわりを増加させ，反対に父親の「日常的かかわり」の多さが，子どもの「引っ込み思案」を強めていた。このように「引っ込み思案」を巡って親子間に循環的な相互作用が展開されているが，そのかかわりの影響は母子と父子の間では対照的であった。最後に年齢別のパス解析を行い，検討した。

キーワード　社会性，養育態度，親のかかわり，幼児期，協調性，引っ込み思案

問　題

母親と父親の子どもへのかかわりは，子どもの社会性の発達に対してどのような影響を与えているのだろうか。社会性の発達（social development）という概念は，人間関係や対人行動における適応的な行動の発達に焦点を当てているので，人に対する振る舞い方やものの言い方といった技術（social skill）（相川，2000）や社会的相互作用を形成し維持するための社会的能力（social competence）（堀野・濱口・宮下，2000）をも含んでいる。社会的行動は，一般に非社会的行動，反社会的行動，向社会的行動に分類されるが，その視点からは，社会性の発達は非社会性や反社会性から広い意味での向社会性への変容だと考えられる。

本研究においては，子どもが他の子どもと交流し，協力的で適応的な行動をとれるようになる形成過程を問題にしたい。具体的には幼児がひとりぼっちの状態（引っ込み思案）から，仲間と交わり協調的な行動がとれるようになる状態に焦点を当てる。積極的に仲間と交流するためには自主性や積極性が必要であり，協調的な

行動がとれるためには自己抑制や自己主張の能力，共感性や向社会性などが必要であり，広範な特性が関与する。

攻撃性は攻撃行動と結びついて社会的不適応を引き起こす可能性が高く，一般に社会性のネガティブな側面として捉えられている。しかし，幼児期の攻撃性は，仲間との葛藤や喧嘩，集団内における自己の社会的地位を上げるための衝突を経験することによって，その後同じような状況を回避するために必要な学習とも関連している（小山，2000）。また，攻撃性は活動性や積極性などの特性と関連が深く，時にポジティブな要素をも内包しているので，社会性の発達と関連が深い。

社会性の発達のスタート地点は主として家庭であり，両親やきょうだいとの相互交渉過程にある。愛着理論によれば，乳幼児期の母親との愛着関係のなかで，内的ワーキング・モデル（internal working model）が形成され，それがその後の人間関係のあり方の基礎になると考えられている（ボウルヴィ，1976；久保田，1995）。就学前の母子関係が安定していると青年期における内的作業モデルとしての自己への評価や他者への信頼が高く，その反対に，就学前の母子関係がアンビバレントであるとそれらが低という結果が示されている（酒井，2001）。

しかし，初期の母親との関係が重要だとしても，人間関係のあり方は，単に母親との初期の関係によって決まるのではなく，子どもがその後に結ぶ人間関係も重要だと指摘されている（森下・木村，2004）。すでに社会の変化に伴って核家族化や少子化が進展している。特に祖母は，時として母親の心の支えになり母親に替わる場合もある（板野・花谷・奥山，1996）。その祖父母が周辺的存在になってしまって，子どもが祖父母に積極的にかかわる機会が減少してきている。また，両親ともに働く家庭が多くなり，親子でのかかわる時間やかかわり方の変化がみられるとともに，近隣の人同士のかかわり時間が減り，社会全体の人間関係の希薄化が生じているといわれている。さらに少子化のなかで，家庭ののなかではきょうだいの数が少なくなり，近隣でも同世代の子どもの数が少なくなり仲間関係を結ぶ機会が減少してきている。

従来，子どもの社会性に関する研究は，子どもと母親との関係に焦点が当てられてきた（中村，1989）。子どもの社会的行動をプラスにするのもマイナスにするのも，母親の養育態度が密接に関係しているという指摘もある（戸田，2006）。3から6歳児の韓国の母親を対象とした研究では，権力断言的態度や愛情取り去り態度は子どもの道徳性に関する社会性の発達に悪い影響を与え，自己志向的な態度や他者志向的な態度が子どもの社会性の発達に良い影響を及ぼしていた（崔，2001）。その後，親の養育態度と社会道徳性との関連について日韓比較研究がなされている（崔・首藤，2005）。また，他者と親密な関係を築きたい，社会にうまく適応していきたいという欲求の強い母親（相互依存的）の方が，女児では向社会的行動が多いのに対して，男児では母親が自分の個性や能力を発揮し，自己実現をしたいという欲求が強い（独立的）方が，向社会的行動や向社会的感情傾向が高かった（樟本・山崎，2002）。これらの研究では自分についても子どもについても母親自身が評定した結果であった。

5歳の保育園児について母親には養育態度の評定を担任には子どもの特徴の評定を求めた研究によれば，養育態度の良好な母親の子どもは注意散漫，孤立傾向，内向性因子の得点が低く，対人関係因子の得点が高かった（木村ほか，2003）。同じように保育園児の母親と担任の評定にもとづいた研究では，母親の養育態度と子どもがトラブルをよく起こすかどうかの間には関連があったが，そこには性差や年齢差がみられた（金子・倉橋・稲垣，1997）。例えば，トラブルをよく起こす男児の母親は，態度の不一致が強かった。また，3歳児の男児では，母親の消極的拒否が強いほどトラブルが少なかった。女児では，母親の干渉や不安が強いほどトラブルを起こしやすかった。同じように母親の態度は母親が評定し，子どもの攻撃性や社会的スキルに関しては保育園の担任に評定してもらった研究では，母親が統制的な子どもの方が関係性

攻撃が高い傾向にあった（橋本, 2008）。しかし，社会的スキルに関して有意差はみられなかった。以上のように，母親と子どもについての研究において，どのような態度が子どもの社会性の発達に影響をもたらすか，必ずしも明確ではない。

さらに，母親だけでなく父親が子どもの社会性の発達にどのような影響を与えるかについての研究は少ない。そのようななかで，加藤ほか（2002）は，母親と父親の育児などへのかかわりが，子どもの社会性に影響を与えると指摘している。また，父親が子どもや妻とコミュニケーションをとることや，家庭で父親の協力が多いほど母親の精神的ストレスが低下し，このことが子どもの社会性の発達に好影響を与えることが示されている（尾形・宮下，2000）。幼児期の子どもは既に父親の勤労に対する感謝の気持を持っているという（中村, 1989）。さらに，子どもは父母をモデルとして向社会的行動や攻撃行動を学習している（森下・庵田，2005）。また，子どもの自己抑制や自己主張の形成には，父親・母親の態度パターンが影響しているが，それは男児と女児では異なっていることが示唆された（森下，2001）。このように，母親や父親へのモデリングや相互作用のなかで，子どもの向社会的行動や自己制御など社会性に関連した側面が発達していくことが示唆されている（森下，1996）。

本研究において，子どもに対するかかわりの豊かさが子どもの社会性の発達にどのような影響を与えるかを明らかにしたい。子どもへのかかわりには，母親父親という性別に関連した役割があるが，本研究では父親だからできるかかわり，母親だからできるかかわりというように分けることはしていない。母親父親に共通する子どもへのかかわりにしぼり，主として日常的な世話や遊びを通してのかかわり，子どもと親との相互のかかわりの豊かさに焦点を当てた。

子どもは家庭のなかで社会の行動様式や人間関係のあり方を発達させると共に，やがて，幼稚園・保育園という環境のなかで先生や仲間とのかかわりを通して社会性を身につける。子どもの社会性の姿が明確に現れるのは，家庭というよりはこのような幼稚園・保育園という集団場面においてであろう。したがって，仲間とのかかわりのみられる幼稚園児を研究の対象とした。そして，子どもの社会性の特徴については幼稚園の担任の視点から評定してもらうこととした。母親父親のかかわりの特徴は本人自身の評定によるものである。このように，子どもの社会性については担任が評定し，親のかかわりについては親自身が評定したものなのでデータソースが異なっている。

親子関係が子どもの性格形成にどのような影響を与えるかに関する研究は多いが，その反対に，子どもの特徴が親子関係にどのような影響を与えるかに関する研究は比較的少ない（柏木, 1988 ）。愛着研究において，親の態度の特徴が子どもの愛着パターンに影響することが示されてきた（久保田，1995；数井・遠藤，2005；森下，2010）。そのようななかで，子どもの気質の特徴もまた子どもの愛着パターンや親の態度・行動に影響することが明らかにされてきている（三宅ほか，1987；森下，1991；森下・森下，2006）。しかし，そのような研究は少ない。

すでに指摘したように，本研究において，まず母親と父親のかかわりの特徴が，子どもの社会性の発達にどのような影響を与えるかを明らかにしたい。両親が積極的に子どもにかかわる場合，子どもは両親との豊かな相互作用を経験することを通して，社会性が発達すると予想される。また，それとは逆に子どもの社会性の特徴が，親のかかわりの特徴にどのような影響をおよぼすか，そこにどのような相互連関があるかを探りたい。

方　法

調査対象　愛知県の私立幼稚園の309名（年少から年長児の全10クラス）について，担任と保護者に評定を求めた。回収されたデータ数は，担任から309（回収率100%），父親から216（回収率69.9%），母親から239（回収率77.3%）であった。そのうち，有効回答数は，担任305（男児148，女児157；3歳児100，4歳児104，5歳児101），父親205，母親211

で，すべてのデータがそろったのは170組（男児83，女児87）であった。

手続き　幼稚園の担任の先生に，受け持っているクラスの子ども全員について個別に社会性の評定を求めた。保護者には担任から保護者へ質問紙を配布してもらい，我が子へのかかわりに関する評定を求めた。あらかじめ配布しておいた封筒に回答後の質問紙を入れてもらい各担任へ提出してもらった。質問紙は無記名であったが，子どものデータが一致するように，担任に配布した質問紙と保護者に配布した封筒へ予め整理番号をふっておいた。

調査時期　担任については2010年８月～９月，保護者：2010年10月～11月。

質問紙の内容　担任に対して，幼児の社会的スキル尺度（中台・金山，2002）に基づいて加筆・修正をした項目への５段階評定を求めた。その内容は，自主性・協調性・自己抑制・攻撃性・否定的感情等の下位カテゴリーからなっていた。親のかかわりの特徴に関して，青柳・酒井（1997），中道・中澤（2003），森下（2006）を参考にしてかかわり尺度を作成して，保護者に対して５段階評価を求めた。その内容は，日常的かかわり・応答性・相互作用・遊びという下位カテゴリーからなっていた。

結　果

１．尺度の因子分析

それぞれの尺度の項目について因子分析を行った。分析には，SPSS16 を使用した。まず，主成分分析を行い，固有値の変動（スクリープロット）と説明率を参考に因子数を決定し，最尤法による因子分析を行い，最終的にプロマックス回転を行った。パターン行列をもとに，各因子に高く負荷する（原則として.30以上）項目の素点の和を尺度得点とし α 係数を算出した。

⑴　子どもの社会性：担任による評定

担任が評定した，園児の社会性30項目について，因子分析を行った。データ数は305であった。因子分析の結果，４つの因子が得られた。第１因子は，因子負荷の高い項目内容から，仲間と仲が良く，仲間に対して適切に対応し，仲間を助けることができ，さらに自主的に手伝いをし，きちんと自分の意見を言い，順番が来るまで待てるというように，向社会的で仲間関係に適応し自己主張や自己抑制ができるという，まさに社会性の核心に当たる特性であった。そこで，第１因子を「協調性」の因子と命名した。第２因子は，思い通りにいかない時にすねたり怒ったりする，相手にちょっかいや攻撃をして仲間と喧嘩をするという内容で「攻撃性」因子と命名した。第３因子は，落ち着きがなく，じっとしていられない，色々なところへ注意を向けてしまう，きまりや指示などが守れない，という内容から「不注意」因子と命名した。第４因子は，仲間とのコミュニケーションをとることが不得手で，仲間に入れず，ふさぎ込んでしまい，寂しそうに遊んでいるという内容で，「引っ込み思案」因子と命名した。この因子は，社会性が未発達の状態を指している。因子間の相関を見ると，第２因子（攻撃性）と第３因子（不注意）との間に比較的高い正の相関があった（表１）。また，第１因子（協調性）と第４因子（引っ込み思案）の間には低い負の相関がみられた。各因子に高く負荷していた項目を用いて尺度を作成し，α 係数を求めたところ，表１に示すようにいずれも高い値が得られた。

表１　因子間相関

因子	第１因子	第２因子	第３因子	第４因子
1				
2	−.140			
3	−.212	.531		
4	−.331	−.170	−.032	
α 係数	.880	.876	.915	.831

本研究おいては，研究目的に沿って子どもの社会性を代表する指標として「協調性」の因子と，社会性の未発達を示す「引っ込み思案」の因子を取り上げ，以後，この二つの特性に焦点を当て分析することとした（表２）。

表２　子どもの社会性の項目

「協調性」	
1	仲間とのいざこざ場面で，適切に対応する
2	友達が困っていたら助ける
3	園にある遊具や教材を片づける
4	教室で自分から進んで仲間の手伝いをする
5	いろんな人と仲良く遊ぶ
6	簡単に友達をつくる
7	友達をいろいろな活動に誘う
8	自分の考えをきちんと主張する
9	みんなと遊んでいて，順番がくるまで待つ
10	言われなくても先生の手伝いをする
11	不公平な扱いを受けたとき，先生にそのことを話す
12	自分からすすんで仲間に話しかける
「引っ込み思案」	
1	他の子どもたちと一緒にいるとき不安そうである
2	悲しそうであったり，ふさぎこんだりする
3	仲間との遊びに参加しない
4	寂しそうにしている
5	ひとり遊びをする

表３　親のかかわり因子と項目

第１因子：日常的かかわり	
1	子どもと夕食を共にする
2	子どもを寝かしつける
3	子どもと一緒に入浴する
4	子どもに絵本をよむ
5	子どもとおしゃべりをする
6	子どもが泣いたりわめいたりしたときに，私がなだめると落ち着く
7	子どもは怒りや喜びなどの感情を私にぶつける
8	子どもと一緒にテレビ（DVD）を観る
第２因子：相互作用	
1	子どもは私になついている
2	私と一緒に遊んでいるととても嬉しそうである
3	私がこの子を抱いたり，ひざの上にのせたりすると，とても心地よさそうにする
4	ひょっとしたら子どもは私が好きではなく，嫌がっているのではないかと感じることがある*
5	子どもを抱きしめたり優しい言葉をかけたりして愛情を示している
6	私が仕事から帰宅すると喜んで出迎えてくれる
7	子どもがイライラしていると思ったとき，「どうしたの」と聞いてみる
第３因子：遊びを通してのかかわり	
1	あなたが家にいるとき，ボール遊びやゲームなど子どもと一緒に過ごす時間をもっている
2	子どもと一緒に遊ぶ
3	休みの日には子どもから一緒に遊ぼうと誘ってくる
4	子どもを散歩や公園に連れていく
5	子どもと一緒にゲームをする
6	子どもが一人で遊んでいて，退屈そうだなと思ったとき加わって一緒に遊ぶ

⑵　親のかかわり：保護者自身の評定

保護者が評定した，親子のかかわりに関する項目について，母親と父親の有効回答を合せて因子分析した。因子分析の結果，３つの因子が得られた（表３）。第１因子は，負荷の高い項目内容（子どもと夕食を共にする・子どもを寝かしつける・子どもと一緒に入浴するなど）が示すように日常生活での子どもへのかかわりであり，「日常的かかわり（日常）」因子と命名した。第２因子は，負荷の高い項目内容（子どもは私になついている・私と一緒に遊んでいるととても嬉しそうである・子どもを抱きしめたり優しい言葉をかけたりして愛情を示している）から親子相互に愛し合い交流しているという因子で，親子間の「相互作用」因子と命名した。第３因子は，子どもと一緒に遊ぶという項目に代表されるような「遊びを通してのかかわり（遊び）」因子と命名した。内容的には相互に似ているかのようにみえるが，因子間相関はいずれも比較的低い正の相関を示していた（表４）。因子に対応する尺度のα係数を求めたところ，第３因子は必ずしも高い値ではなかった（表４）。

表４　因子間相関

因子	第１因子	第２因子	第３因子
1			
2	.364		
3	.238	.302	
α係数	.791	.725	.618

⑶　各尺度得点の分布

各尺度について統計量を求め，尺度得点の度数分布図を作成した。その結果，担任評定に関して，「協調性」はほぼ正規分布を示した。「引っ込み思案」得点は低い得点に分布が偏っ

た。親のかかわり尺度に関して，父母の「日常的かかわり」と「遊びを通してのかかわり」得点はほぼ正規分布に近く，父母の「相互作用」の豊かさの度数分布は高得点に偏っていた。

⑷　母親・父親のかかわりと子どもの社会性

子どもに対する母親と父親のかかわりについて，尺度得点間の相関係数を求めた（表５）。母親と父親の間ではすべての尺度間に有意な相関はみられず，互いに独立したかかわりを示していた。それに対して，父親内の３尺度間には比較的高い正の相関があった。母親の評定に関しては，「遊びを通してのかかわり」は「日常的かかわり」とやや高い正の相関がみられたが，「遊びを通してかかわり」との間には低い相関しかみられなかった。

母親と父親のかかわりに関する３尺度の得点と，子どもの「協調性」「引っ込み思案」との尺度得点間の相関係数を表６に示す。全体にあまり高い相関はなかった。母親の「相互作用」は子どもの「引っ込み思案」との間に低い有意な負の相関がみられた。また，父親の「日常的かかわり」は子どもの「引っ込み思案」との間に低い有意な正の相関がみられた。

表５　母親と父親のかかわりの相関係数（全体）

		母親			父親		
		日常	相互	遊び	日常	相互	遊び
母	日常						
	相互	.320**					
	遊び	.549**	.160*				
父	日常	−.060	.073	.124			
	相互	−.113	.102	−.130	.448**		
	遊び	−.044	−.009	.108	.502**	.496**	

* P<.05,　** p<.01

表６　親のかかわりと子どもの社会性（全体）

	母親			父親		
教員評定	日常	相互作用	遊び	日常	相互作用	遊び
協調性	−.070	.110	−.040	.105	−.115	.116
引っ込み	.019	−.240**	.010	.177*	.135	.068

* P<.05,　** p<.01

２．母親・父親のかかわりと子どもの社会性（分散分析）

母親と父親の子どもへのかかわりが，子どもの社会性にどのような影響を与えるかについて検討した。前に示したように，かかわりに関する尺度間の相関係数は，母親および父親に関していずれも正の相関が認められた。そこで，母親と父親それぞれについて，３尺度の総和をもって，「かかわり総得点」とした。

次に，子どもについて担任が評定した社会性の尺度得点を従属変数とし，母親と父親それぞれの「総かかわり」得点を独立変数として，２要因の分散分析を行った。その際，母親と父親それぞれのかかわり総得点について，約半数ずつになるように得点の高い群（H群）と低い群（L群）に分けた。

男女別に，社会性の発達とかかわりの深い「協調性」と「引っ込み思案」に焦点を当てて，

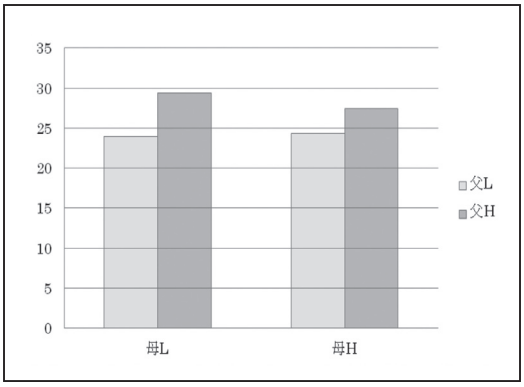

図１　父母のかかわりと「協調性」（女児）

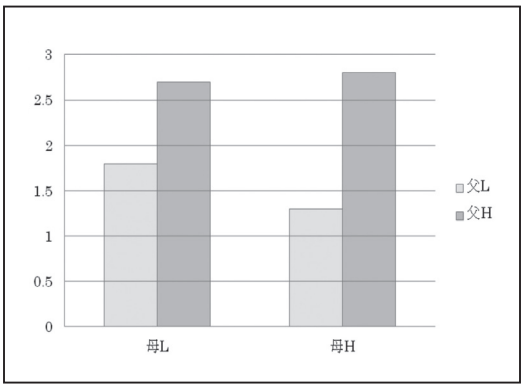

図２　父母のかかわりと「引っ込み思案」（女児）

分散分析を行った。その結果,「協調性」について，男児に関してはいずれの要因も有意差がみられず交互作用も有意でなかった。女児に関しては父親のかかわり要因のみに有意差があり，かかわりH群の方がL群より協調性得点が高かった（図１）。

「引っ込み思案」について，男児に関しては有意差も交互作用もみられなかった。女児に関して父親のかかわり要因にのみ約10%水準の有意差がみられ，かかわりH群の方がL群より「引っ込み思案」得点は高い傾向があった（図２）。

３．母親・父親のかかわりの特徴が子どもの社会性に与える影響

母親と父親それぞれ３つのかかわりの特徴（「日常的かかり」「相互作用」「遊びを通してのかかわり」）が，子どもの「協調性」と「引っ込み思案」にどのような影響を与えるかを検討するために，パス解析を行った（豊田，2007；小塩，2008；大石・都竹　2009)。子どもの特徴については，社会性という視点から「協調性」と「引っ込み思案」に焦点を当てた。パス解析に際して,「協調性」と「引っ込みに思案」のそれぞれの誤差に双方向のパスを引いた。その理由は,「協調性」と「引っ込みに思案」に関して，母親や父親のかかわりの影響以外に，共通の環境要因や気質などの特徴が影響していると考えたからである。主要な結果は次の通りであった。

①まず，父親と母親のかかわりの特徴を説明変数とし，子どもの社会性を目的変数として男女別にパス解析を行った。その際，有意でないパスを一つ一つ減らしていって，有意なパスだけを残した。その結果，男児に関しては最終的に有意なパスが残らなかった。

女児に関しては，最終的に図３のような比較的適合性の高いパスモデルが得られた。図は５％レベルの有意なパスを示している。「協調性」と「引っ込み思案」の説明率はそれぞれ10%，15%であった。母親の「相互作用」と父親の「遊びを通してのかかわり」が多いほど,女児の「協調性」が高かった。したがって，母親との相互作用や父親の遊びを通してのかかわりが，女児の「協調性」の発達にプラスの影響を与えていると考えられる。また,「協調性」と「引っ込み思案」の間には-0.37という負の相関がみられた。

②「引っ込み思案」については，父親からの「日常的かかわり」が多いほど，かつ母親との「相互作用」が少ないほど，女児の「引っ込み思案」が強かった。つまり父親と母親のかかわりの影響は異なり，父親の「日常的かかわり」は子どもの「引っ込み思案」を強め，母親の「相互作用」は子どもの「引っ込み思案」を低

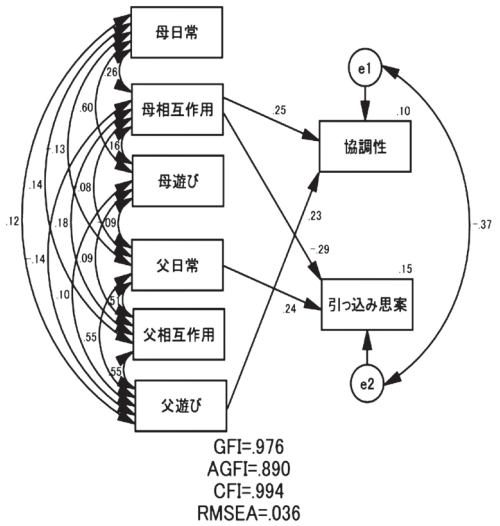

図３　親のかかわりと子どもの社会性（女児）

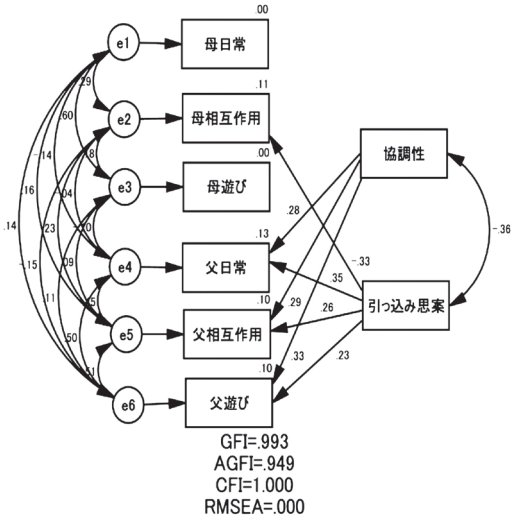

図４　子どもの社会性と親のかかわり（女児）

下させるという特徴を示していた。

全体として，母親の「相互作用」と父親の「遊びを通してのかかわり」が子どもの社会性の発達にとって重要であると考えられる。さらに父親の日常的なかかわりの多さはこどもの「引っ込み思案」を強めるようである。

4．子どもの社会性の特徴が母親・父親のかかわりに与える影響

③次に，子どもの社会性の特徴を説明変数とし，両親のかかわりの特徴を目的変数としてパス解析を行った。男児に関しては有意なパスがみられなかった。

女児に関しては，最終的に図４のような適合性の高いパスモデルが得られた。図は５％レベルの有意なパスを示している。女児について「協調性」が高いほど，父親のすべてのかかりが高かった。したがって，上記の分析と合わせると，主として母親の「相互作用」の多さが女児の「協調性」を高め，その「協調性」が父親のかかわりを高めると考えられる。

④女児の「引っ込み思案」は母親の「相互作用」を低下させ，その母親の「相互作用」の少なさが子どもの「引っ込み思案」を強めていた。他方，女児の「引っ込み思案」は父親の全般的なかかわりを高め，反対に父親の「日常のかかわり」の多さが，子どもの「引っ込み思案」を強めていた。このように「引っ込み思案」を巡って親子間に循環的な関係が展開されているが，そのかかわりの影響は母子と父子の間では異なった相互連関がみられた。

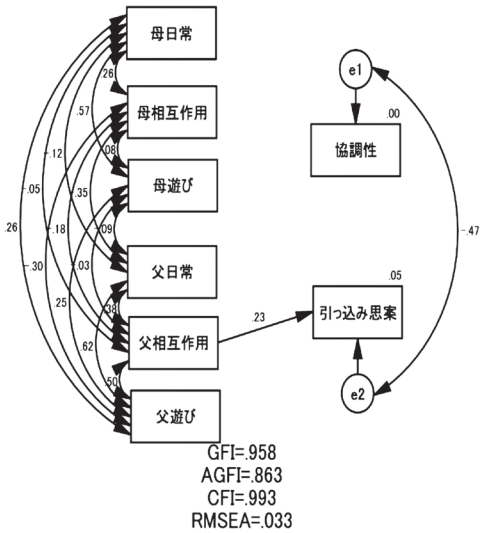

図５　親のかかわりと子どもの社会性（３歳児）

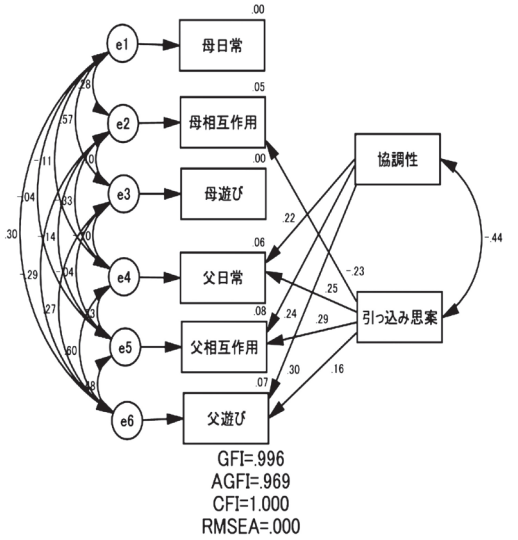

図６　子どもの社会性と親のかかわり（３歳児）

5．３歳児，４歳児，５歳児の特徴

年齢別のパス解析を行った。男女に分けると人数が少ないので，男女を込みにした分析を行った。

⑴　３歳児（図５，６）

父親の「相互作用」から子どもの「引っ込み思案」に唯一の有意（５％）なパスがみられた。父親の「相互作用」が多いほど子どもの「引っ込み思案」を強めていた。

他方，子どもから親へのパスは多く，子どもの特徴が親のかかわりに影響を及ぼしていることが推測される。「引っ込み思案」から父親の「遊びを通してのかかわり」以外は危険率１～10％以下のパス係数を示していた。子どもの｛協調性｝と「引っ込み思案」が共に父親のすべてのかかわりを高めていた。母親に対しては，子どもの「引っ込み思案」が母親の「相互作用」を低下させていた。

⑵　４歳児（図７，８）

親からのパス（0.1から10％水準のものを示

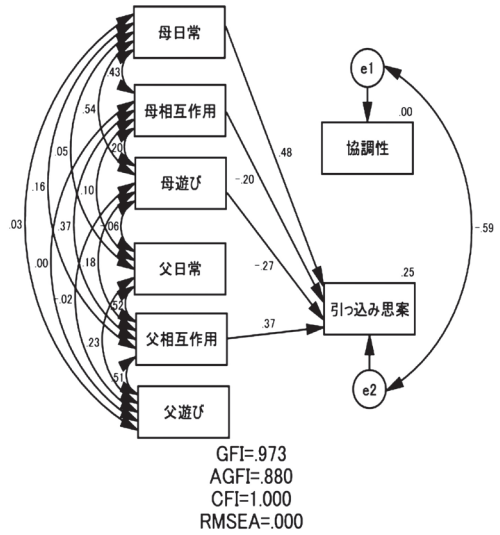

図７　親のかかわりと子どもの社会性（４歳児）

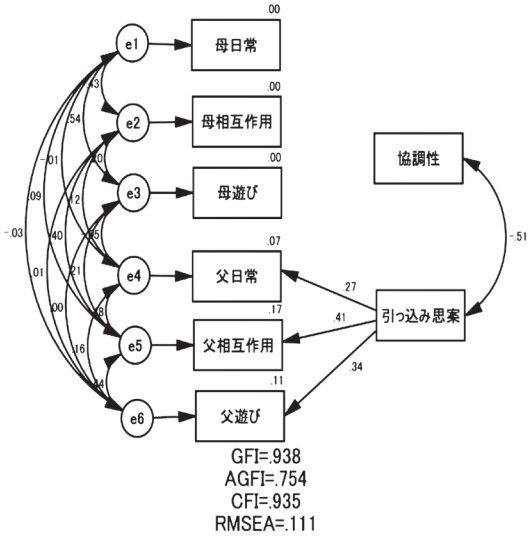

図８　子どもの社会性と親のかかわり（４歳児）

す）をみると，母親の「日常的かかわり」が多く，「相互作用」や「遊びを通してのかかわり」が少ないほど，そして父親の「相互作用が」が多いほど子どもの「引っ込み思案」が強かった。「相互作用」に関しては，子どもの「引っ込み思案」に関して母親と父親では反対方向の影響を与えていた。

子どもから親への影響は，「引っ込み思案」が父親のすべてのかかわりを高めていた。

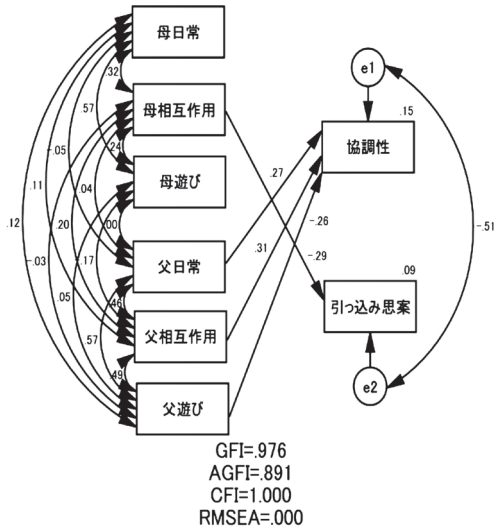

図９　親のかかわりと子どもの社会性（５歳児）

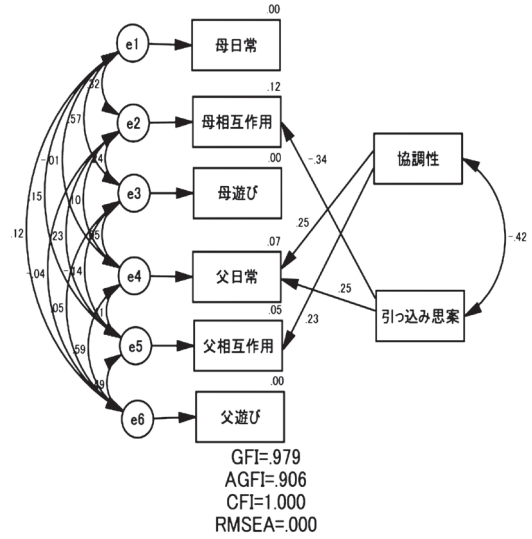

図10　子どもの社会性と親のかかわり（５歳児）

⑶　５歳児（図９，10）

図は約５％以下の有意なパス係数を示している。父親の「日常的かかわり」や「相互作用」が多く「遊びを通してのかかわり」が少ないほど，子どもの「協調性」が高かった。また，母親の「相互作用」が少ないほど子どもは「引っ込み思案」が高かった。

子どもの「協調性」は父親の「日常的かかわ

り」と「相互作用」を高めていた。他方，子どもの「引っ込み思案」は母親の「相互作用」を低下させる反面，父親の「日常的かかわり」を高めていた。

考　察

1．親のかかわりの特徴が子どもの社会性の発達に与える影響

母親と父親のかかわりの多さが幼稚園での子どもの社会性にどのような影響を与えるかについて，分散分析の結果，次のことが明らかとなった。男児について有意差はみられなかった。しかし，女児については，父親のかかわりが多い群の方が「協調性」が豊かであるが，他方「引っ込み思案」も強いという傾向があるという結果であった。「協調性」と「引っ込み思案」の因子の間には負の相関がみられることから，矛盾した結果のようにみえる。そこにはかかわりの総量ではなくて，かかわりの質（特徴）が関係している可能性がある。

そこで，父親と母親のかかわりの特徴が，子どもの「協調性」と「引っ込み思案」にどのような影響を与えるかという視点から，パス解析を行った。その結果，男児に関しては有意なパスモデルが得られなかった。女児に関しては，最終的に比較的適合性の高いパスモデルが得られた。母親の「相互作用」と父親の「遊びを通してのかかわり」が多いほど，女児の「協調性」が高かった。また，「引っ込み思案」については，父親からの「日常的かかわり」が多いほど，かつ母親の「相互作用」が少ないほど，女児の「引っ込み思案」が強かった。

以上のように，女児について，母親と子どもとの「相互作用」の豊かさが子どもの協調性を高め，子どもの「引っ込み思案」を低下させるということを示していた。他方，父親に関しては，「遊びを通してのかかわり」の多さが子どもの「協調性」を高め，父親の「日常的かかわり」の多さがが子どもの「引っ込み思案」を強めるという結果であった。そこに，母親と父親のかかわりの影響の違いが認められた。

2．子どもの特徴と親のかかわりとの相互連関

子どもの社会性の特徴について担任に評定を求めたのは，親のかかわりの特徴測定の約２ヶ月前であった。したがって，このような時間的差異から，子どもの特徴が親のかかわりに影響をもたらしたという可能性がある。そこで，上記とは反対に，子どもの社会性の特徴が両親のかかわりの特徴にどのような影響を与えるかという視点からパス解析を行った。その結果，男児に関しては有意なパスモデルは得られなかったが，女児に関しては最終的に適合性の高いパスモデルが得られた。女児の「協調性」について，それが高いほど，父親の「日常的かかわり」「相互作用」「遊びを通してのかかわり」のすべてのかかりを高めていた。したがって，上記の結果を総合すると，継続的な親子の相互関係のなかで，主として母親の「相互作用」の多さが女児の「協調性」を高め，その高い「協調性」が父親のかかわりを高めた可能性がある。

他方，女児の「引っ込み思案」は母親の「相互作用」を低下させていた。その母親の「相互作用」の少なさが子どもの「引っ込み思案」を高めていた可能性がある。それとは対照的に，女児の「引っ込み思案」は父親の全般的なかかわりを高めていた。反対に父親の「日常的かかわり」の多さが，子どもの「引っ込み思案」を高めていた可能性がある。このように「引っ込み思案」を巡って親子間に循環的な関係が展開されているが，母子と父子の間では異なった連関を示している可能性がある。

3．年齢別のパス解析と相互連関

年齢別のパス解析の結果から相互連関をみると，３歳児について，子どもの「協調性」と「引っ込み思案」という特徴が父親のかかわりすべてを高めていた。「協調性」と「引っ込み思案」は負の相関があるなかで，父親のかかわりを高めているのは「協調性」の高い子どもや，その反対の「引っ込み思案」の強い子どもということになるだろう。そして，父親の「相互作用」の多さが子どもの「引っ込み思案」を強めるという相互連関がみられた。

４歳児では，母親の「日常的かかわり」の多さや「相互作用」と「遊びを通してのかかわり」の少なさが，子どもの「引っ込み思案」を

強めていた。そして，子どもの「引っ込み思案」が父親のすべてのかかわりを高めていた。この結果は，母親のかかわりの少なさが子どもの「引っ込み思案」を介して父親のかかわりを高めている可能性を示唆する。これとは別の解釈として，子どもの「引っ込み思案」が強いと父親のかかわりが多くなるので，母親は子どもに対して「日常的かかわり」以外のかかわりをもつ余地が無くなる，したがって，母親は「相互作用」や「遊びを通してのかかわり」が少なくなるという解釈も可能である。また，４歳児でも父親との「相互作用」が多いほど子どもの「引っ込み思案」が強くなり，子どもの「引っ込み思案」が強いほど父親との「相互作用」が多くなるという循環的な関連がみられた。

５歳児について，父親のかかわりの特徴が子どもの「協調性」を高めていた。そして，子どもの「協調性」は父親の「日常的かかわり」や「相互作用」を高めていた。そこには子どもの「協調性」を介して父と子のかかわりに循環的な関連がみられた。それとは別に，母親との「相互作用」の少なさが子どもの「引っ込み思案」を強め，子どもの「引っ込み思案」は母親との「相互作用」を低下させるという相互連関がみられた。

以上の文脈のなかで父親に焦点を当てると，父親と子の「相互作用」は，３，４歳時点では子どもの「引っ込み思案」を強め，またその「引っ込み思案」は父親との「相互作用」を高めるというような循環的な相互連関がみられる。しかし，そのような循環的な連関は，５歳児ではみられなくなっている。むしろ，５歳児では父親との「相互作用」や「日常的かかわり」は子どもの「協調性」を高め，その「協調性」は父親との「相互作用」や「日常的かかわり」を高めるというように変化している。

それに対して，母親に焦点を当てると，３歳児の「引っ込み思案」は母親との「相互作用」を低下させ，４，５歳児の母親との「相互作用」の少なさは子どもの「引っ込み思案」を強めている。そして，５歳時点の子どもの「引っ込み思案」は母親との「相互作用」を低下させるというような親子間に循環的な連関がみられる。

このデータを３年間の追跡的研究結果と同じだと一応仮定して，連続的なながれとしてとらえると，次のような推測が可能である。３歳時点に子どもの「協調性」や「引っ込み思案」が父親のさまざまなかかわりを高める。このようななかで「引っ込み思案」の子どもに対する父親の「相互作用」の多さが，４歳時点の子どもの「引っ込み思案」をより強めている。そして，再び4歳時点での「引っ込み思案」の強い子どもは，父親のかかわりが多さを引き起こしているが，そのうち父親の「日常的かかわり」や「相互作用」の多さが，５歳時点の子どもの「協調性」を高めている。そして，その子どもの「協調性」は父親の「日常的かかわり」と父親との「相互作用」を増加させている。以上，３，４歳時点で子どもの「引っ込み思案」から引きおこされた父親のかかわりの内，「日常的かかわり」や「相互作用」が，５歳時点では子どもの「協調性」を高めており，かかわりの機能が変化している点が注目される。

それに対して，３歳時点での子どもの「引っ込み思案」は母親との「相互作用」を低下させている。その母親の相互作用の少なさは，４歳時点の子どもの「引っ込み思案」を強め，さらに５歳時点の子どもの「引っ込み思案」は母親の「相互作用」を低下させている。５歳時点においても，母親との「相互作用」の少なさが子どもの「引っ込み思案」を強め，その引っ込み思案が母親の「相互作用」の少なさを引き起こしている。

以上の点をまとめると，４，５歳時点において母親の豊かな「相互作用」が子どもの「引っ込み思案」を低下させるということ，３，４歳時点において父親の「相互作用」が子どもの「引っ込み思案」を強めていたのが，５歳時点においては父親の豊かな「相互作用」が子どもの「協調性」を高めるようになるということが重要だと考えられる。

４．今後の課題

本研究において，すすんで手伝いをし，きち

んと自分の意見を言いかつ我慢ができ，仲間と良い関係を結ぶというような，社会性の核心に当たる特性（思いやり・自己制御・社会的能力を総合した機能）を「協調性」という名の下に扱ってきた。これらの特徴が一つの因子として抽出できたことは意義深く，幼稚園という場のなかで，子どもの行動の背景にそのような社会性の機能が発達している姿としてとらえることができるだろう。

年齢を込みにした場合，女児では変数間に有意な関連がみられたのに，男児ではみられなかった。このことをもって，幼児期の親子関係は男児の社会性の発達には影響しない，ということはできないだろう。本研究では親子関係として日常的なかかわりや遊びを通してのかかわり，そして親子の愛着関係ともいうべき相互作用を扱ってきた。その限りにおいて男児には明確な関連がみられなかった。しかし，親から子どもへのかかわりそのものが重要なことはいうまでもないが，遊びを通してのかかわりのなかで，また相互作用のなかで子どもは何を学習しているかが問われなければならない。年齢別の分析においてみたように，３，４歳時点では父親との「相互作用」が子どもの「引っ込み思案」をめぐって行われていたものが，５歳時点では子どもの「協調性」を引き出している点に注目すべきものがある。また，親のかかわりのなかでどういう言葉かけがなされ，また親のかかわり行動の背景にどのような態度が秘められているかも子どもの社会性の発達にとって重要である（森下・藤田，2012）。さらに親と子どものかかわりのなかで，子どものなかにどのようなモデリングが生じているかも，注目する必要があるだろう（森下，1996）。したがって，本研究は，親のかかわりを通して子どもの社会性の発達の理解に一歩踏み出したに過ぎなく，課題は多い。

今回の分析では分析対象が少なかったことから年齢ごとの分析では男女を込みにした。しかし，そこにも男女差があると考えられ，今後，対象の数を増やして男女別に年齢ごとの分析をする必要があるだろう。また，ある時点での子どもの特徴が，次の時点での親のかかわりにどのような影響を与え，さらにそれが次の時点の子どもの発達にどのような影響を与えるか，という発達連関を実証するためには時系列的なデータが必要となる。そのためには，縦断的な研究が必要であり，今後に残された重要な課題である。

謝辞：本研究の調査にご協力いただきました中京女子大学附属幼稚園の園長先生をはじめ，加藤道子先生，担任の先生方，保護者の方々に心から感謝申し上げます。

引用文献

相川　充　2000　人づきあいの技術：社会的スキルの心理学　サイエンス社

青柳　肇・酒井　厚　1997　アダルト・アタッチメントと回想による幼少期のアタッチメントとの関係　早稲田大学人間科学研究　**10**，7-16.

ボウルヴィ，J.（著）黒田実郎ほか（訳）1976　母子関係の理論Ⅰ：愛着行動　岩崎学術出版社

橋本育代　2008　幼児期における母親の養育態度と幼児の攻撃行動及び社会的スキルとの関連　臨床教育心理学研究　**34**，27.

堀野　緑・濱口佳和・宮下一博　2000　子どものパーソナリティと社会性の発達：測定尺度つき　北大路書房

板野美佐子・花谷香津世・奥山清子　1996　母親がみた子どもと祖父母の交流　川崎医療福祉学会誌　**1**（6）63-71.

金子智栄子・倉橋紘子・稲垣節子　1997　保育園における幼児のトラブルに関する研究Ⅰ―母親の養育態度や社会性の発達との関連性―　日本保育学会大会研究論文集　**50**，240-241.

柏木惠子　1988　全般にわたってのコメント（母子関係〈特集〉）心理学評論　**31**，178-181.

加藤邦子・石井クンツ昌子・牧野カツコ・土谷みち子　2002　父親の育児かかわり及び母親の育児不安が3歳児の社会性に及ぼす影響：社会的背景の異なる２つのコホート比較から　発達心理学研究　**13**，30-41.

数井みゆき・遠藤利彦編　2005　アタッチメント：生涯にわたる絆=Attachment　ミネルヴァ書房

木村留美子・竹俣由美子・津田朗子・藤田三樹・木村　礼・関　英俊　2003　養育環境が社会性の発達に及ぼす影響について　金大医保つるま保育学会誌　**27**，121-128.

小塩真司　2008　はじめての共分散構造分析―Amosによるパス解析　東京図書

小山高正　2000　ヒト幼児にみられる攻撃性　動物心理学研究　**50**，255-259.

久保田まり　1995　タッチメントの研究：内的ワーキング・モデルの形成と発達　川島書店
樟本千里・山崎　晃　2002　母親の独立・相互依存的自己理解と発達期待が幼児の向社会性に及ぼす効果　幼年教育研究年報　**24**，41-47.
三宅和夫・栄島和子・加藤 忠明・陳　省仁・庄司順一・臼井　博・矢野喜夫　1987　発達における気質の役割（自主シンポジウム）日本教育心理学会総会発表論文集（29），S52-S53.
森下正康　1989　児童期の母子関係とパーソナリティの発達　心理学評論　pp. 60-75.
森下正康　1991　第２章　母子関係　松田せい（編）新・児童心理学講座第12巻 家族関係と子ども　金子書房　pp. 31-72.
森下正康　1996　子どもの社会的行動の形成に関する研究　―同一視理論とモデリング理論からのアプローチ―　風間書房
森下正康　2001　幼児期の自己抑制機能の発達（3）父親と母親の態度パターンが幼児にどのような影響を与えるか　和歌山大学教育学部実践総合センター紀要　**11**，87-10.
森下正康　2006　幼児期の親子関係と向社会的行動・攻撃性のモデリング（2）―父母の態度パターンによる分析―　和歌山大学教育学部紀要　教育科学　**56**，33-41.
森下正康　2010　児童の心理―パーソナリティ発達と不適応行動―　サイエンス社
森下正康・庵田奈甫　2005　幼児期の親子関係と向社会的行動・攻撃行動のモデリング　和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要　**15**，47-56.
森下正康・藤田のゆり　2012　母親の言葉かけの特徴と食卓の雰囲気が児童の自尊感情と他者受容におよぼす影響　発達教育学研究（京都女子大学大学院紀要）**6**，31-41.
森下正康・木村あゆみ　2004　母親の養育態度におよぼす内的ワーキング・モデルとソーシャルサポートの影響　和歌山大学教育部教育実践研究指導センター紀要　**14**，123-131.
森下順子・森下正康　2006　幼児の気質が母親の行動特徴と養育態度に及ぼす影響　和歌山大学教育学部紀要（教育科学）　**56**，43-50.
中台佐喜子・金山元治　2005　幼児の社会的スキル尺度　堀　洋道・櫻井茂男・松井　豊編　心理測定尺度集Ⅳ　子どもの発達を支える〈対人関係・適応〉サイエンス社　PP. 225-321.
中道圭人・中澤　潤　2003　父親・母親の養育態度と幼児の攻撃行動との関連　千葉大学教育学部研究紀要　**51**，173-179.
中村千恵　1989　幼児の社会性の育ちに関する調査研究の試み　日本保育学会大会発表論文集　**42**，230-231.
大石展緒・都竹浩生　2009　Amosで学ぶ調査系データ解析：共分散構造分析をやさしく使いこなす　東京図書
尾形和男・宮下一博　2000　父親と家族―夫婦関係に基づく妻の精神的ストレス，幼児の社会性の発達及び夫自身の成長発達―　千葉大学教育学部研究紀要Ⅰ.教育科学編　**48**，１-14.
崔　順子　2001　韓国における母親の養育態度と幼児の社会性の発達との関係に関する研究―３歳から６歳児道徳高度の研究―　日本教育心理学会総会発表論文集　**43**，117.
崔　順子・首藤敏元　2005　親の養育態度と幼児の社会道徳性との関係に関する韓・日比較分析―質問紙の結果　埼玉大学紀要教育学部教育科学　**54**，35-44.
酒井　厚　2001　青年期の愛着関係と就学前の母子関係―内的作業モデル尺度作成の試み―　性格心理学研究　**9**，59-70.
戸田須恵子　2006　母親の養育態度と幼児の自己制御機能および社会的行動との関係について　北海道教育大学釧路校研究紀要　**38**，59-69.
豊田秀樹　2007　共分散構造分析【Amos編】―構造方程式モデリング―　東京図書